

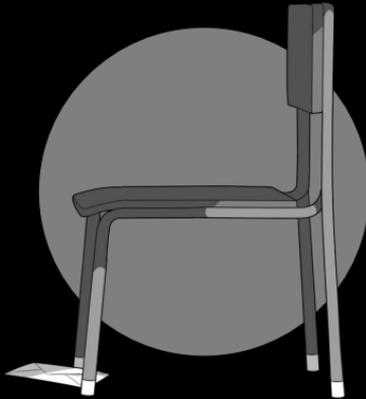
リセット【reset】

不本意な人生を選択させられた者に残された、
唯一の救済。現実には存在しない。

補注：不本意な人生を選択した者には、「覚悟が足りなかったな！」とか
「運が悪かったんだよ」という言葉が与えられる。

第 1 部

リセツトルーム入室資格獲得の
ためのテスト 前



そのころ——。

ぼくたちの中学校では、オバケや七不思議の話がはやっていた。

ぼくは、そういうオカルトのようなものに興味がない。どんな不思議な現象も、“勘ちが^{かん}い”や“トリック”を使えば説明できると思っているからだ。

そんなぼくにも聞こえてくるぐらいなのだから、どれだけはやっているか想像してもらえと思う。

オバケについては、

「最近、放課後になると出るんだって——。真っ黒なシーツをかぶったオバケ。だれもいない校舎を、フラフラフラフラさまよってるそうだ」

こういう話がささやかれている。

——だれもいない校舎をさまようオバケを、いったいだれが見たのだろう？ それに、真っ黒なシーツ？ ゴーストみたいなオバケなら、ふつうは白のシーツをかぶるんじゃないのか？

これらのことから、作り話だと想像できる。

そして、このオバケと関わってくるのが、学校の七不思議だ。

昔は、どこの学校にも七不思議があったそうだけど、今は少なくなっているという話も聞いた。いったい、どんな組織が調査したのだろう？ データがあるのなら見てみたい。

うちの学校の七不思議は少し変わっていて、全部で21個あるそうだ。

どうしてそんなに多いのか？ 疑問に思った生徒が調べたところによると——。

今から30年ほど前、我が校に七不思議はなかった。それを

寂しく思った在校生が、七不思議を募集したそうだ。結局、50近い七不思議が集まり、全校生徒による選考会が行われて20が選ばれた。定番の「21番目の七不思議を知ったら死ぬ」というものが付け加えられ、全部で21の七不思議が完成した。

——七不思議なのに、どうして21個もあるんだろう……？

だれも、この疑問を口にしないのが、ぼくにとっては最大の不思議だ。

とにかく、その七不思議の中に、「理科準備教室のひび割れた鏡を見たら死ぬ」というものがある。

この話を女子の多くが信じていて、絶対に理科準備教室に入らない。そのため、実験器具の準備やかたづけは男子に丸投げされている。

そして、放課後に現れるオバケは、その準備教室の鏡から出てくるというのだ。

——だれもいない校舎をさまようオバケ……。だれが、理科準備教室の鏡から出てきたのを見たんだ？ そもそも、鏡を見たら死ぬんじゃないのか？

そして最近、十数人の生徒が転校していった。怪談話を怖がったからだといううわさもあるが、オバケが出るからという理由で転校するだろうか……？

まあ、いろいろ疑問に思うことはあるが、どうでもいい。

ぼくは、できるだけ日々を静かに過ごしたい。ほかに望むことはない。

なのに……。

「きみは、リセットルームについてどう思う？」

いきなり声をかけられ、ぼくの頭は真っ白になる。白髪頭になったという意味ではない。

どうすればいいのか、考えることが多すぎてわからなくなったのだ。

まず、声をかけてきたのがだれかを判断しなければならない。

ここは、3年生の教室。話しかけてきたのは、やせて背の高い少年。黒ぶちめがねをかけている。ぼくと同じ制服を着ていることから考えて、クラスメイトだろう。

クラスメイトなのに、だれだかわからないのか？ ——あなたは、そう思うかもしれない。これについては、ぼくが人の顔を覚えるのが苦手だからという理由で納得してもらうしかない。

名前は……わからない。これも、名前を覚えるのが苦手ということで納得してもらおう。

ただ、名前がわからないと不便なので、彼の名前は『A』ということにしておこう。

そして、最大の謎。

——なんだ、『リセットルーム』って？

ほかにも、Aがどうしてぼくに話しかけてきたのか？ という謎もあるが、それは“気まぐれ”とか“近くの席に、ぼくがいたから”ということで納得しよう。

ここで、考えなければいけないことが1つになり、ぼくの頭は、ようやく余裕を持って動きはじめる。

ただ、動きはじめたからといって、答えが出るわけじゃない。

リセットルームとは何か？

名前から、ルームの1つであることは推察できる。しかし、どんなルームかまではわからない。



そして、わからないことを考え続けるのは、時間のむだだ。
知ってる人間が目の前にいるんだから、聞けばいい。

「なんだ、リセットルームって？」

するとAはおどろいた表情になり、ぼくの顔をのぞきこむ。

「おまえ……知らないのか？」

——さっきは“きみ”だったのが、“おまえ”呼ばわりに変
わった。

急に距離を縮めてきたことにとまどいはあったが、たいした
問題じゃない。

Aは、少し得意げに——でも、それを悟られないよう、抑え
た口調で話しはじめる。

「リセットルームってのは、文字どおり人生をリセットできる
ルームのことだ」

「リセットって……」

ぼくは、「そんなことできるのか？」という言葉のをみこむ。

いや、ルームならできるのか？

なぜなら、ルームは、もう1つの現実世界と言われている。
人生をリセットできるようなルームが存在してもおかしくな
い……のか？

考えこんでるぼくの顔を、Aがのぞきこむ。

「リセットなんて、できっこないって思ってるだろ？」

「……」

「それが、そうでもなさそうなんだ」

得意そうなAの顔。

「うわさだけどな——。ウォーレン・ライトが、リセットルー
ムの開発を考えてるそうさ。完成には十数年かかるって話だが、

実は試作品^{プロトタイプ}はできているってうわさもある」

ウォーレン・ライトは、ルームのCEO。

謎^{なぞ}のゲームクリエイターで、その総資産は、小国の国家予算を上回ると言われている。

「ライトがCEOになって、『ルームを、もう1つの現実世界にする』って言ってるのは知ってるか？」

ぼくは、うなづく。

「人生をやり直したいゲストに新しい人生^{あた}を与える——そんなルームを作りたいって、ライトは言ってるんだ」

「そんなの無理だろ」

ぼくが言うと、Aは指をチッチッチとふった。

「ライトがホストするんだぜ。できるに決まってるじゃないか」

断言するAに、なにも言い返せない。

「リセットルームを作るために、ライトは世界中からデータを集めてる。しかも、開発の助けになるようなデータには、高額の報酬^{ほうしゅう}を出すってさ」

——高額って、どれくらい？

そう聞く前に、Aが、ぼくの耳に口を寄せる。

「人生を7回やり直せるぐらいの額だそうだがぜ」

「それは……すごい金額なのか？」

「そうなんじゃねえか？ たぶん」

ぼくら中学生には、想像できない。

数人のクラスメイトが、ぼくら2人の横を「なに、バカな話してるんだ」って感じで通り過ぎる。

Aが聞いてくる。

「なあ、リセットしたら、おまえはどんな人生にしたい？」

「……」

ぼくは答えない。

答えがないんじゃない。考えはあるが、言いたくないんだ。

こういうときは、逆質問だ。

「きみは？」

「おれ？ おれは……こんなのがいいなって希望はあるけど、おまえには言わない」

「？」

ぼくを見るAの目の奥^{おく}に、ひそかな憎^{にく}しみのようなものを感じる。

ぼくは首をひねる。

——どうして？

ぼくの表情を見たAが言う。

「わからないだろ？ それは、おまえが恵^{めぐ}まれてるからだよ」

——はあ……？ 恵^{めぐ}まれてる？ このぼくが？

あまりにばかげた返答に、ぼくは言葉を失う。

かまわず、Aが続ける。

「おれは、リセットしたいよ。本当にリセットできるのなら、残りの人生10年ぐらい短くなってもいいな」

——そう言うヤツに限って、死ぬ前に「やっぱり、10年もどしてくれ！」って見苦しく騒^{さわ}ぐに決まってる。

そう思ったけど、口にしない。

とにかく、Aがリセットを強く希望してることだけは、よくわかった。

あと、不思議なのは、どうしてぼくにリセットルームの話を

するのかってことだ。

ぼくの顔をのぞきこむA。

「ああ、おまえには、おれの気持ちが想像できないか」

「……」

「おまえ、現状に満足してて、悩みなんかなさそうだもんな」

「……」

何も言う気になれない。

——悩みがないようにふるまうため、ぼくがどれだけ苦勞してるか……。

わかってくれとは思わないが、せめて少しは想像してほしいな。

昼休み——。

ぼくは、音楽室のとなりにある楽器庫に行く。

3年生の教室は校舎2階にある。音楽室は3階なので、トイレに行くふりをして教室を抜け出す。

だれもいないのを確認し、楽器庫のドアを開ける。楽器ケースが置かれた棚が並んでいるいちばん奥に体を潜め、首からさげているお守り袋から指輪を出す。

内側にセンサーの付いた指輪。ルームに入るための専用端末だ。

授業で使うタブレットやパソコンを使えばルームに入ることはできるが、学校では入室が禁止されているし、生徒が学校にいるあいだはプロテクトがかかっている。

考えてみたら、当然の話だ。

ルームに入っているあいだは、すべての感覚がルーム内に取

られている。言ってみたら“魂が抜けた状態”だ。

危険がせまってもわからないし、命に関わる。

ぼくは、指輪型の専用端末を持ってくることを特別に許可されている。でも、その理由をいちいちクラスメイトに説明するのがわずらわしい。だから、ふだんはお守り袋に入れてわからないようにしているのだ。

もともと、ルームへの入室は許可されているが、勝手に入っていいわけじゃない。先生に『入室許可申請書』を出し、はんこをもらった上で、保健室のベッドからしか入室できない。当然、その間は先生に監視されている。

こんな面倒なことをしたくないから、楽器庫を使っているわけだ。

状況説明を終えたぼくは、指輪を右手の人さし指にはめ、目を閉じる。

軽いめまい。

目を閉じているのに、今いる楽器庫が見える。

それだけじゃない。目の前に、レトロなコンピュータが置かれている。

デイパックくらいの大きさがある本体。その上には、ブラウン管型のモニタ。本体の前には、重厚感のあるキーボード。

もちろん、このコンピュータは現実世界に存在しない。ルームの端末が、ぼくの脳内に出現させたものだ。

手をのぼし、キーボードに指をかけ、『探偵ルーム』のパスワードを打ちこむ。

今の技術なら、パスワードを入力しなくても本人確認する方法は無数にある。いや、いつ現実世界からルームに入ったのか

わからないぐらいスムーズに入室できる。

なのに、レトロなコンピュータを出したり、パスワードを打ちこませたりするのは、『探偵ルーム』のホスト——シロクマの趣味だ。

ぼくは慣れた手つきでパスワードを打ちこみ、『探偵ルーム』に入室する。

その瞬間、ぼくの体はぬいぐるみのアバターに変わる。キリンのぬいぐるみだ。

どんなアバターになるかは、ルームによって決まっている。

読書愛好家のルームの1つでは、全員が本のアバターに変わる。

テーブルのまわりに開いた本が並び、だれもいないのに勝手にページがめくられていくのは、かなりシュールな光景だ。

ほかにも、球体愛好家の『ボールルーム』では、テニスボールやタコ焼きなど、さまざまな丸いアバターに変身する。ただ、地球より大きなアバターになるのは禁止だ（逆に、地球より小さいサイズなら、アバターになることは認められている）。

また、レトロゲーム愛好家のルームでは、入室した者がレトロゲームのアバターに変身する。モグラたたきのゲームのアバターになった者は、かなりスリリングな体験をするという話を聞いたことがある。というのも、穴から顔を出す数匹のモグラたちは、言ってみれば自分の体の一部。それをたたかれるのだから、退出したときはアザだらけになってるそうだ。

最近では、馬のアバターになって競馬場を走り回る『ウマ人間ルーム』も人気になっている。

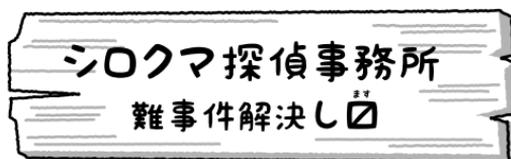
ルームも年々進化し、技術的にはアバターにならなくても使

用できる。

しかし、変身せずに使用すると、ルームと現実世界の区別が難しくなり、いろんな問題が出てくる。そのため、アバターに変身することが義務化され、プロテクトがかけられているのも納得できる。

いろんなアバターがあるが、ポピュラーなのは動物のぬいぐるみ。だから、ぼくのアバターは、ほとんどのルームで麒麟のぬいぐるみだ。それは、この探偵ルームでも変わらない。

『シロクマ探偵事務所』と書かれた木の札がかかっているドア。



ぼくが開けるより前に、ドアが開いた。

中から、白い布をすっぽりかぶったアバターが出てきた。ぼくがいるのを無視し、室内に向かって一礼して、ルームから出ていく。

入れ替わりに、部屋に入る。そう広くない部屋の家具は、ヴィクトリア調で統一されている。

マントルピースの木枠には、ナイフで留められた手紙。ベルシャ・スリッパの中に入れられたパイプたばこ。——これらを見ると、探偵ルームのホストがまともな神経をしていないことが想像できる。

そして暖炉の前には、籐の安楽いすに座ったシロクマのぬいぐるみ。

探偵ルームのホスト——シロクマ探偵だ。

いつもはひまそうに数独の雑誌を広げたりアイマスクをして昼寝ひるねをしたりしてるのだが、今日はちがった。

シロクマの前の丸いすに、つば広の帽子ぼうしに黒サングラス、顔の下半分をおおうマスクにダボダボのコートを着たアバターが座っている。

コートのすそからはみ出たヘビのしっぽが、ゆらゆら揺れている。

ヘビのアバターかと思ったけど、マスクやコートで隠かくれていて確かめようがない。

そのアバターの上に、ふきだしが現れる。



本当にだいじょうぶでしょうか？

シロクマは、カルテのようなものから、丸いすに座ったアバターに顔を向ける。



シロクマ

わたしをだれだと思ってるんです？ シロクマですよ。わたしを信じて、治療ちりょうをまかせてください

シロクマの上にもふきだしが現れる。

そう、探偵ルームの中では、すべてのせりふがふきだしで現れる。

ルームが普及ふくまうしはじめたころならともかく、現在、せりふがふきだしに変わるようなルームは探偵ルームぐらいだ。

これも、ホスト——シロクマの趣味しゅみ。ぼくに文句を言う資格

はない。



シロクマ

では、次の診察しん さつは7日後で――



……

アバターが、頭を下げていすから立ち上がる。

そして、ぼくの横を通り過ぎ、ドアを開けて出ていく。ぼくを無視したくせに、室内に向かって一礼するのは忘れない。

残されたぼくに向かって、シロクマが片手を上げる。

同時にふきだしが現れる。



シロクマ

やあ。今日は、ずいぶん早く来たね。学校は休んだのかい？

いえ、今は昼休みです。それより、さっきの人たちは？



ぼく



シロクマ

わたしの患者かん じやだよ。リアルで診察する時間がなくてね。申し訳ないがルームに来てもらったわけだ。それにリアルより、ルームでの診察を望む患者も増えているしね

シロクマは、現実世界のことをリアルと呼ぶ。



現実世界でのシロクマの職業は、精神科医だ。そんな彼が、
どうしてルームで探偵をしているのか？

以前、こんなことを言っていた。

[わたしは、ふつうの精神科医にはできない方法で患者の心を癒やしてるんだ。探偵をしているのも、精神科医の仕事の1つとも言える]

聞いていて、よくわからなかったのを覚えている。

シロクマが、安楽いすに座り直し、腕を組む。



シロクマ

放課後を待たずに探偵ルームに来たのは、一刻も早く解決してほしい謎があるからだろ？ 話してみたまえ

だれでもわかるレベルの謎解きを、得意げに言う。

ぼくは、食卓のいすに腰を下ろす。

言い忘れたが、ぼくはシロクマ探偵の助手の仕事をしている。

いつからだったかは、もう忘れてしまった。また、どうして探偵助手をするようになったかも覚えていない。

何か、派手な事件を通してシロクマと知り合ったような気もするのだが、過去のことなんてどうでもいい。

重要なのは、“今”だ。

リセットルームって、ご存じですか？



ぼく



.....

シロクマ

シロクマは、答えない。

知らないから答えないのか、答えたくないからだまっているのか――。

表情のないぬいぐるみからは、何もわからない。



リセツルームのこと、どこで知ったんだい？

シロクマ

逆に質問され、ぼくはAから聞いた話をする。



なるほど。きみのクラスメイトが言ってることは、わたしがうわさで知ってることと同じだ

シロクマ

シロクマ先生は、リセツルームは本当に作れると思いますか？



ぼく



.....

シロクマ

これにも答えない。

しばらくしてから、シロクマは立ち上がる。そして、室内を歩きはじめた。



シロクマ

きみは、こんな言葉を知ってるかな？『高名で年配の科学者が「可能であると」言った場合、その主張はほぼまちがいない。また「不可能である」と言った場合には、その主張はまずまちがっている』



ぼく



シロクマ

今は『クラークの第1法則』

それ以上の説明はせず、シロクマが腕^{うで}を上げる。本人としては、指を1本のぼしたつもりなのかもしれないが、ぬいぐるみだからわからない。



シロクマ

つまり、進化したルームに不可能はないんだよ

本人はニヤリと笑ったつもりかもしれないが、ぬいぐるみだからわからない。

昼休みが終わり、ルームを出たぼくは教室にもどる。

みんな、いつもと同じように話したり笑ったり追いかけていたり――。

そこは、いつもと同じ、中学3年生の教室。

でも……。

この中に、いったい何人ぐらい人生をリセットしたい人間が

いるのだろうか？

1人か2人か……ひょっとして全員か……？

そう思うと、にぎやかな教室が、なんだか現実味のない映画のワンシーンのように見えた。

1週間後——。

家に、封筒が届いた。真っ赤な角封筒だ。蠟で封がしてある。

いつもなら手で破くのだが、ペーパーナイフを使って丁寧に封を開ける。

中に入っていたのは、1枚の白い紙。

リセットルームへ入る資格を得るための招待状

あなたは、リセットルームへ入るための資格を得る
テスト生に選ばれました。

次の土曜日、16時30分に学校へ来てください。
来ない場合は、資格を放棄したものとみなします。

招待主 鶴

白い紙の上半分に書かれた5行の文章。

「……」

勧誘詐欺の手本のような手紙を書け——AIに命令したら、
こんな文章を書いてくるんじゃないだろうか？